

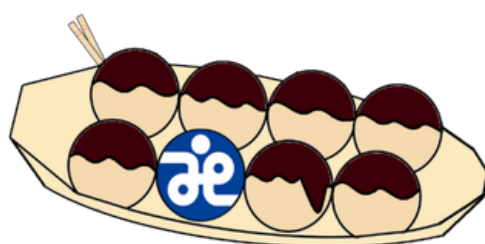
令和7年度

「総合的な福祉教育実践研究会」

「社協の総合性を活かした福祉教育とは？

～福祉教育事業の実践と研究から学ぶ～」

報告書



osakafusyakyo.or.jp

社会福祉法人 大阪府社会福祉協議会

目次

1	はじめに	...	1
2	社協の総合性を生かした福祉教育とは？	...	2
3	プログラムの企画		
	豊中市社会福祉協議会	...	7
	泉佐野市社会福祉協議会	...	9
	門真市社会福祉協議会	...	11
	東大阪市社会福祉協議会	...	13
	交野市社会福祉協議会	...	15
	熊取町社会福祉協議会	...	17
	和泉市社会福祉協議会	...	19
4	まとめとして	...	21
	「ふくしと教育の実践研究所 SOLA 主宰」(社会福祉士)		
	新崎 国広 氏		
5	資料集	...	22



— はじめに —

平成29（2017）年に発足した大阪府社会福祉協議会 業務研究会「総合的な福祉教育実践研究会」は、ふくしと教育の実践研究所 SOLA主宰 新崎 国広氏（社会福祉士）にご指導いただき、今年度で9期目を迎えることができました。新崎氏に心より感謝申し上げます。

本研究会は、市町村社協における福祉教育について、社協の総合力を発揮する機会ととらえ、さらなる推進、検証、普及に取り組むとともに、実践に関わる職員同士の交流や研鑽、資質向上を図っています。また、子どもも大人も含めた地域を対象とした「ともに生きる力」を育む福祉教育プログラムの提案・展開に資することをめざし、それぞれの市町村社協の今までの福祉教育実践や地域特性を活かしながら、常に個々の実践に満足することなく、新しい福祉教育（実践のブラッシュアップ）に取り組んできました。

今年度は、「社協の総合的な福祉教育について」をテーマに、当事者や地域住民、社会福祉施設などの①多様な主体との連携・協働、②福祉教育プログラムの開発、そしてそれを可能にする③社協職員としての資質向上の3点を柱にメンバーで情報共有・意見交換を行い、議論を深め、プログラムの企画・検討を行いました。

社会的孤立の深刻化が社会の大きな課題となる中、社協の総合性を生かした“福祉教育”は今後さらに求められていきます。本報告書が、府内市町村社協の福祉教育実践推進の一助になれば幸いです。

令和8年3月

大阪府社会福祉協議会 大阪府ボランティア・市民活動センター



社協の総合性を生かした福祉教育とは？

本検討会では3つの視点から、講義や意見交換で学びを深めていきました。下記にポイントを記載します。

1. 多様な主体との連携・協働 —福祉教育推進のプラットフォーム—

当事者や地域、施設、学校、ボランティアや企業、関係団体など多様な主体と連携・協働し、協議・対話をすることにより、質の良い福祉教育の実践がつけられます。

ある小学校で実施するプログラムをつくりあげるための協働実践のプラットフォームから、市町村域の福祉教育について、ボランティア・地域貢献委員会（施設連絡会）・学校（校長や福祉教育の担当の先生など）や関係団体等によって共有・検討するような場としてのプラットフォームもあります。

協働実践のプラットフォームとしては、当事者参画の重要性とボランティアの担い手確保の課題をメンバーで議論しました。ボランティアの育成、ボランティアグループの組織強化を行うとともに、施設や他の関係団体とのネットワーク構築の重要性を確認しました。



「学校・当事者・社協で共につくる福祉教育～」

門真市社会福祉協議会

市内小中学校校長会にて、前年度の福祉教育実施校、回数、プログラム内容等を発表し、当年度の実施について周知をします。各小中学校、学年単位で申し込みがあり、各種障がいのプログラムの中から選択してもらい、目的や課題、当事者が伝えたいことや学習内容等、学校、当事者、社協それぞれの思いが同じ方向を向いた授業になるよう、しっかりと打合せを行います。①障がいについての基礎的な理解、②当事者の講話体験、③学習の振り返りといった順番に学習を進めていきます。

子どもも大人も、地域で当事者を見かけたら、挨拶や声掛けをするきっかけとなる授業をおこないます。

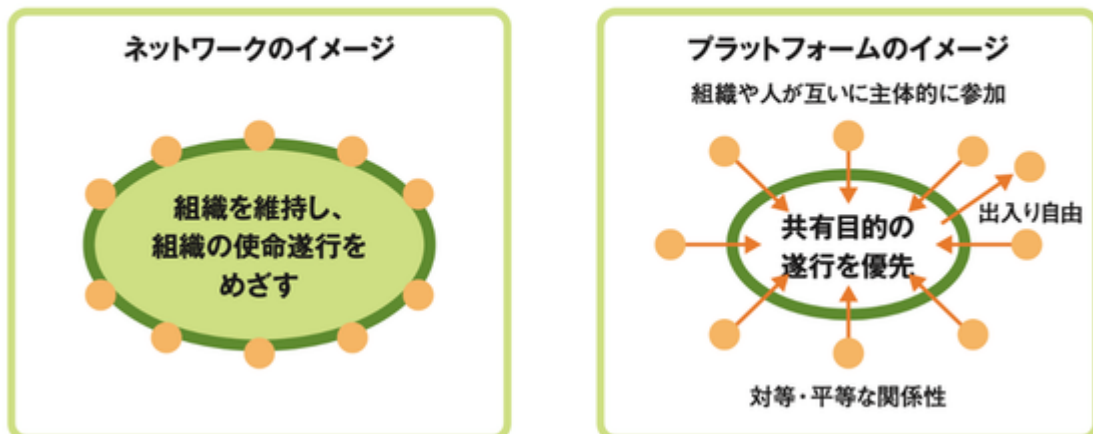


「プラットフォームの構築」

交野市社会福祉協議会

令和6年度よりふくしボランティアを育成し、小学校や地域でふくし教育を実施。関係機関の専門性を活かし、地域で支え合うことを学ぶため、交野市ボランティアグループ連絡会や交野市社会福祉施設地域貢献連絡会、校区福祉委員会などと協働し、プラットフォームを構築しています。

【図表3】 ネットワーク、プラットフォームのイメージ



「福祉教育実践ガイド」（平成24(2012)年3月 全社協発行）8頁

2. 福祉教育プログラムの開発 —サービスラーニングの視点を—

車いすやアイマスク体験などの疑似体験学習については、高齢者や障がい者の不便なことが強調され、「かわいそう」「自分は障がいがなくてよかった」などの貧困な福祉観を生んでしまう恐れがあります。自分たちの生活する地域のあり方や地域課題、福祉課題を発見し、課題へ関わることで学びを深め、主体的に市民性を育むことができる「サービスラーニング」の視点を取り入れ、体験学習プラス学びを深める工夫が必要です。

特に、当事者や支援事業所・団体等が当事者の強みや生活者としての視点を伝えることで、子どもたちの学びを深めることができます。障がい当事者が直接話すことや許可を得て作成した日常生活のようすの動画を見ることで、子どもたちの新たな気づきにつながります。検討会では、身体障がいや高齢だけではなく、精神障がいや発達障がいの当事者（親）が直接子どもたちに思いを語るプログラムも意見交換しました。

近年では、子どもたちの「受援力」を高めるプログラムの開発、防災の視点を取り入れたプログラムの実践、ひきこもりの子どもたちを対象にしたプログラムの開発など多様な福祉課題をともに考える実践もつくられています。

多様性を認め、障がいやバリアを作っている社会のことであり、社会を変えていくことで誰もが豊かに暮らせる社会をめざしていくことができるようになります。



「防災×福祉教育」

～災害ボランティアの養成と防災ゲーム～

東大阪市社会福祉協議会

災害ボランティアを養成するため、毎月勉強会を開催しています。活動の一環として地域で防災ゲームを実施し、防災への関心を高めるとともに、災害ボランティアにつなげていく取り組みを続けています。今後は、養成したボランティアが小中学校でも活動できるよう、展開していきたいです。

「受援力を高める」～福祉すごろく～

豊中市社会福祉協議会

「15歳からの社会保障」を題材として「福祉すごろく」を独自に開発し、特に中学校における福祉教育のツールとして活用しています。グループワークをしながら楽しく「困ったときにどうしたらいいか」を考えてもらい、社会保障について学ぶ機会にしています。

学校における福祉教育（福祉教育事業）※では、学校の担当者と実施する目的の共有を綿密に行う必要があります。そして、社協の担当者だけでなく、ボランティア、地域貢献委員会（施設連絡会）、地区福祉委員会（校区福祉委員会）などさまざまな団体の協力を得て、地域のつながりを強化できるような実践をつくりあげていきます。

地域における福祉教育（福祉教育機能を有する事業）※は、サロン活動の企画・運営、住民懇談会など地域の活動を社協職員がコーディネートし、活動を通して学んだことを確認し語り合うことで、学校の間だけではなく、地域の中にも学びの機会をつくることができます。社協事業の中に、この福祉教育の視点を入れ、社協全体で取り組むことで、地域共生社会の構築につながっていきます。

※P22【参考】参照



「地域で実践！福祉教育」～認知症フレンドリーキッズ～

熊取町社会福祉協議会

認知症について正しく学び、認知症とともに生きる人の思いに触れながら、地域で支え合い共に暮らすことの大切さを考える講座を開催しました。小学生15名とその保護者が参加し、理解を深めました。



「防災×福祉教育」～地域のサロンで防災ゲーム～

和泉市社会福祉協議会

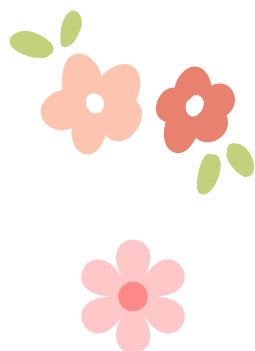
小学生が地域のいきいきサロンを訪問し、高齢者とともに防災ゲームを行い、楽しみながら防災について考えるきっかけを作っています。子どもと高齢者の交流の機会ともなり、相互理解にもつながることがあります。

3. 社協の総合性を生かした福祉教育—社協職員としての資質の向上—

前述のとおり、社協の事業はすべて福祉教育につながっています。部署間連携することで、これまで積み上げてきた実践とノウハウを社協内に広く継承することができます。そして、社協の既存事業や取り組みと連携して推進するなど社協の総合性が発揮できるよう、人材養成と社協内部のネットワークづくりにも取り組んでいきます。

学校と地域をつなぐためには社協職員の「コーディネート力」、現状を変え、新しい何かをつくりだす「プロデュース力」、みんなを巻き込む「ネットワーク力」が重要です。

個別プログラムの企画においては、関係者との目的の共有、リフレクション（ふりかえり）の重要性も確認しました。福祉教育の意義や必要性、理論を理解し、学校や地域に広く伝えることができる力、福祉教育のプログラムの実践ができる力が社協職員に求められています。



福祉教育推進プログラムチーム

泉佐野市社会福祉協議会

部署横断（総務、地域、包括、ボランティアセンター）で協働し、福祉教育を推進していくチームを編成。市内小中学校への福祉教育実施の意向調査のとりまとめや、教育委員会との連携、資源の集約を担っています。また、関係職員へ振り返りのためのグループワークを実施しています。

本研究会のメンバーは、上記の視点を学びながらそれぞれ、プログラムを企画しました（7ページより掲載）。担当者としての思いや福祉教育プログラムの意義などをご確認ください。

キーワード: 高齢者の理解、施設・ボランティア・学校の協働

タイトル: 福祉施設と協働した、より学びを深める福祉教育

豊中市社会福祉協議会

プログラムの概要

「目的／ねらい」

福祉施設の協力を得て体験学習を実施することで、体験だけでなく「車椅子ユーザーのくらし」についても子どもたちに知ってもらうことで学びを深めてもらう。

実施するためのプロセス

STEP1 9月ボランティアセンター担当者よりCSWに福祉教育の現状について説明会を実施

STEP2 10月CSWより福祉施設へ福祉教育への協力について提案、了承いただきプログラムの相談、学校への提案

STEP3 10/23 福祉教育の実施

STEP4 学校からの振り返りシートを福祉施設・ボランティアに共有

きっかけや課題意識

体験学習で協力いただいている登録ボランティアグループの高齢化により、今後の体験学習について考える必要が出てきた。

また、子どもたちから「車椅子に乗ってみると怖かった」という感想をもらうこともあり、体験だけでなく実際に車椅子を使う当事者の思いなどにも触れる機会を作ることで、「怖い」だけで終わらない体験学習ができないかと考えていた。

協働先

登録ボランティアグループ

登録ボランティア

学校

福祉施設

CSW






実施内容

- ・車椅子体験学習はこれまでボランティアグループのみで対応いただいていたが、CSWのネットワークを活かしてつながりのある高齢者施設に投げ掛けたところ協力いただけることとなり、3・4年生を対象に実施。
- ・車椅子体験1時間・高齢者施設の方からの講義1時間の計2時間を学年入れ替わり制で行った。車椅子体験はボランティアグループと登録ボランティアの協力を得て実施。講義は高齢者施設の方が施設での暮らしを動画にしたものを作成いただき、「車椅子ユーザーがどのような生活送っているのか」「車椅子を使うことによって行きたいところに行けること」などを小学生にもイメージが付きやすいようにお話いただいた。
- ・学校には学習後振り返りシートを記入いただき、福祉施設・ボランティアに共有した。

ここがポイント!!! 講師からのコメント

高齢者理解をテーマに、学校・福祉施設・ボランティアが連携した体験型の福祉教育を実践されています。車椅子体験に加え、実際に介護の現場で働く施設職員から、車椅子を利用する方の日常や思いを直接学ぶ機会を設けることで、子どもたちは体験だけでは得られない「くらしの視点」に触れることができている。怖さや不安で終わらせず、理解や共感へと学びを深めている点が特長です。地域資源を生かした協働の取組は、福祉を身近に感じ、支え合いの心を育む福祉教育として高く評価できます。

今後における	担当者として大切にしたいこと
<p>福祉施設の方からのお話があることで、子どもたちにとって、車椅子の使い方や介助の方法だけでなく、車椅子を使う方の実際のくらしのイメージが深まりいい体験学習になったと感じる。</p> <p>今後、より多くの福祉施設に協力いただけるよう、CSWと協働しながら施設にとってもメリットのある提案ができるよう考えていきたい。また、体験学習が福祉施設と学校をつなぐ架け橋の一つになることで、さらに福祉施設と学校とが連携した新たな取り組みが生まれることにもつながっていけばと思う。</p>	<p>核家族化が進み、3世代同居も少ない現代においては、家族を介護している姿を目にすることもあまりなく、人がどのように年を重ねていくのかを実際に目にする機会が少ない中で大人になっていく子どもたちが多いと感じる。その中で、ボランティアによる体験学習に加え、実際に介護職として働かれている高齢者施設の職員からもお話いただくことで「実際に車椅子を使う高齢者の日々のくらし」にも触れてもらう機会を作ることができれば、より福祉教育として学びが深まるのではないかと考えた。</p> <p>加えて、私自身もCSWを兼ねていることから、福祉施設を子どもたちや地域住民にとってもっと身近に、そして頼れる存在と感じてもらうきっかけづくりという視点でも体験学習での連携を大切にしていきたい。</p>

地域と社協について	
市の概況	地域の特性
<p>大阪府北部に位置しており、人口は大阪府内で4番目に多く39.8万人で中核都市に指定されている。ベッドタウンであり、通勤族も多い街である。北東部の新千里丘陵を中心に1960年代から千里ニュータウンの開発がされた。高齢化率は直近5年間では大きな増減はなく25.8%となっている。</p> <p>全国高等学校野球選手権大会の前身である全国中学校優勝野球大会が初めて豊中で開催されたことから、「高校野球発祥の地」とされている。</p>	<p>特に南部地域は少子高齢化が進んでおり、小・中学校の統廃合が行われ令和5年度に小中一貫校が開校し、令和8年度にもう1校が開校される予定となっている。</p> <p>また、通勤族が多い街であることもあり、自治会加入率は年々減少傾向で34.4%となっている。市内では校区福祉委員、民生・児童委員、登録ボランティアや安心サポーターなど様々な形で活動しているボランティアが約8000人ほどいる。</p>
社協の福祉教育推進体制	ホームページ・SNSなど
<ul style="list-style-type: none"> ・ボランティアセンターの業務として行っており、登録ボランティアグループ等の協力を得て実施しているが、固定化してきている。 ・社協の部署横断プロジェクトとして、「15歳からの社会保障」を題材にした「福祉すごろく」を開発、中学生向けに体験学習として実施している。 ・CSWのプロジェクトとして「学校と福祉の連携プロジェクト」を立ち上げており、早期に気になる家庭とつながることを目的に、連携に関するガイドを作成。主任児童委員とともにガイドを持参して小中学校を訪問し、連携を進めている。 	<p>市社協ホームページ</p>  <p>ボランティアセンター「ぶらっと」ホームページ</p>  <p>市社協Facebook</p> 

キーワード:障がい理解、地域との連携・協働

タイトル: アンプティサッカーから始まる地域の輪

泉佐野市社会福祉協議会

プログラムの概要

<p>「目的／ねらい」</p> <p>従来は体験学習中心の福祉教育であったが、障がい当事者が講師となり、スポーツの魅力や地域福祉活動、日常生活について語る機会を設けることで、障がいのある人も地域で共に暮らす社会の一員であることへの理解を深める。あわせて、障がいに対する固定的なイメージや心理的なバリアを和らげ、互いを尊重し支え合う意識の醸成を図る。</p>	<p>きっかけや課題意識</p> <p>学校の先生から、「障がい者理解の授業に取り組んでいるが、子どもたちにマイナスイメージが残ってしまうことがある」との声があった。令和5年度より、障がい当事者をゲスト講師に迎え、授業でアンプティサッカーを実施してきた。ゲスト講師が校区内でこども食堂を運営していることから、今年度から授業の中に日常生活の様子や子ども食堂の取り組みを取り入れた。当事者の日常に触れることを通して、子ども・当事者・地域がつながる輪を築いていきたい。</p>
<p>実施するためのプロセス</p> <p>STEP1 学校、当事者とのプログラム内容の打ち合わせ STEP2 授業の実施 STEP3 ゲスト講師が開催している子ども食堂への参加 STEP4 振り返り</p>	<p>協働先</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学校 ・福祉委員会 ・社協 ・当事者 ・子どもたち

実施内容

- ①学校の授業で当事者による講話
 - 義足になった経緯 ●なぜ子どもたちにお話しをしているのか ●当時の気持ち ●気持ちの変化
 - 子ども達が出来るサポート ●伝えたいこと ●どんな支えがあったのか ●普段の私生活(仕事や趣味など)
 - こども食堂のこと
- ②アンプティサッカーの体験
 - 体験を通して、楽しさ、多様性を理解してもらう
- ③子ども食堂の開催(ゲスト講師が中心となって活動している)
 - 子どもたちに来てもらうことで当事者の日常を知ってもらう。また、そこを入口にこども食堂への参画を促していく。

アンプティサッカーとは?

手や足に切断障がいのある人がクラッチを使いプレーするサッカー。フィールドプレイヤー6名とゴールキーパーが、25分ハーフ、7対7で40m×60mのコートで戦う。



ゲスト講師:川合 裕人 氏

元アンプティサッカー日本代表キャプテン
21歳の時にトラック運転中の事故で左足を切断。現在はお弁当屋を営む傍ら講演会などでアンプティサッカーの普及啓発活動をおこなっている。また、地域で子ども食堂を開催したり、能登で炊き出しのボランティア活動もおこなっている。

ここがポイント!!! 講師からのコメント

障がい当事者の講話やアンプティサッカー体験、地域福祉活動を組み合わせた福祉教育に取り組まれています。当事者が社会でいきいきと活躍する姿や日常生活に触れることで、子どもたちは障がいを特別なものとして捉えるのではなく、共に地域で暮らす身近な存在として理解を深めています。授業にとどまらず、子ども食堂への参加を通して世代や立場を超えた交流を生み出している点も特長です。体験と継続的な関わりを大切にされた実践は、地域のバリアを取り除き、支え合う心を育む福祉教育として高く評価できます。

ゲスト講師 川合さんからのメッセージ

アンプティサッカーを通じた講話では「諦めないこと」、「一歩踏み出す勇気」を伝えていきたいと考えています。私は「できないことを探すより、できることを探す」という言葉に感銘を受け、今は自分のモットーとなっています。私が学校でミニゲームに参加しているとき、子どもたちは私のことを障がい者だと思っていません。アンプティサッカーには壁を取り払う力があります。また子ども食堂では子どもたちの第三の居場所を作り、団地内で開催することで一人暮らし高齢者との交流が生まれています。今後も福祉教育を通じてメッセージを伝えていきたいと思ひます。

今後において

今年度実施した福祉教育の感想を学校、当事者と共有。プログラムの改善点などを洗い出す。
毎年継続的にアンプティサッカーをおこなうことで地域に浸透していくことを目指すとともに、地域で働く姿や子ども食堂での姿などで自然体を知ってもらうことを目指す。

担当者として大切にしたいこと

障がいの有無にかかわらず、社会の一員であることを講話やパラスポーツの体験から理解してもらいたい。授業だけで終わるのではなく、子ども食堂へ来てもらい、一緒に楽しみ、一緒に活動することを重視したい。

地域と社協について

市の概況

泉佐野市は、大阪府南部に位置し、市の主要部を占める関西国際空港によって「世界と日本を結ぶ玄関都市」としての役割を担っています。対岸にはりんくうタウンが広がり、商業施設やホテルが集積しています。現在の人口は約10.3万人、面積は約56.5平方キロメートルです。内陸部には、大阪府唯一の温泉郷である犬鳴山温泉や、日本遺産に認定された中世の荘園遺跡日根荘など、豊かな自然と歴史的景観が共存しています。また、地場産業である泉州タオル発祥の地としても知られる。

地域の特性

小学校13校、中学校が5校ある。福祉委員会が14地区78支部あり、各地区ごとに学校との交流を行っている。今年度は社協を中心に小学校12校で福祉教育を実施している。
今年度から福祉用具の事業所と協働で車いすに関する授業をおこなっている。またプログラムに応じてボランティアや当事者による講話を実施している。

社協の福祉教育推進体制

社協全体として学校での福祉教育をおこなっており、多くの職員が参加している。部署横断の福祉教育推進プロジェクトチーム(以下PT)があり、情報の集約や教育委員会との打ち合わせなどを行っている。今年度は福祉教育に携わった職員でグループワークをおこない、意見交換やノウハウの共有、蓄積をおこなった。それをまとめ、教育委員会とも協議を行う予定。

ホームページ・SNSなど

①社協HP



②YouTube



③インスタグラム



キーワード:障がい理解、当事者・学校・協力団体との協働

タイトル: 学校と共につくる福祉教育～障がい理解(視覚障がい)～

門真市社会福祉協議会

プログラムの概要

「目的／ねらい」

視覚障がいについて正しく知り、理解を深める。障がい当事者の話を聞き、当事者が自分で出来ること、周りの協力があれば出来ることを知ってもらい、自分たちに出来ることを考える機会とする。

きっかけや課題意識

市内の小中学校より、障がいをテーマとして福祉教育の依頼があり実施が決まる。実施内容、方向性等についてを担当教員の方としっかりと打合せすることを大事にしている。

実施するためのプロセス

STEP1 年度当初に市内小中学校の校長会にて前年度の報告及び福祉教育の説明、周知を実施。随時、依頼受付。
STEP2 社協より、障がいの基礎理解等のスライド資料を学校へ提供。学校教員にて事前学習を実施。
STEP3 社協・当事者が学校へ出向き、当事者講話、質疑応答、ガイドヘルプ体験等を実施。
STEP4 学校教員にて、振り返り事業を実施。社協からのアンケート、児童の振り返りシートを作成し、社協へ提出。社協より当事者へ感想等を伝える。

協働先

市内の小中学校
障がい当事者



実施内容

- ・福祉教育プログラムには、肢体不自由(車いす)、視覚障がい、聴覚障がい、知的・発達障がい、障がい者スポーツ(ボッチャ)、ふくしとわし(講義)、高齢者疑似体験等があり、どのプログラムを学習するかは、小中学校教員の希望を聞き、打合せにて決める。
- ・視覚障がい理解については、まず学校教員にて当事者講話までに視覚障がいの基礎知識の学習を実施してもらい、社協・当事者が学校へ出向き当事者の生活の様子動画、当事者の講話、ガイドヘルプ体験等を実施。
- ・後日、学校教員による振り返り授業を実施。その際社協よりアンケートや振り返り記入シートを提供し、後に社協へ提出してもらい、内容を当事者へ共有した。

ここがポイント!!! 講師からのコメント

学校・当事者・協力団体と丁寧に連携しながら、障がい理解を中心とした福祉教育を実践されています。事前学習から当事者講話、体験学習、事後の振り返りまでを一連の学びとして構成することで、子どもたちは障がいのある方の暮らしを具体的に知り、自分にできることや周囲の協力の大切さを考える機会を得ています。また、教員との綿密な打合せを重ね、「何を学んでほしいか」を共有しながら共につくりあげる姿勢は、学びの質を高めています。地域に根付く「おたがいさま」の精神を生かした取組は、共生社会の担い手を育む福祉教育として高く評価できます。

今後における	担当者として大切にしたいこと
<p>本会が取り組んでいる福祉教育には、視覚障がい者理解のほかに、ふくしとわたし、肢体不自由（車いす）、高齢者（疑似体験）、聴覚障がい、障がい者スポーツ（ボッチャ）、知的・発達障がいのプログラムがあります。R7年度は全体で40回弱のプログラムの実施となりました。今後も小中学校、当事者、協力団体、社協それぞれが継続出来る様、随時実施方法の検討と改善を取り入れながら、当事者が伝えたいことを意識して、学校と共に福祉教育活動に取り組んでいきたいです。</p>	<p>学校より福祉教育の依頼時において、「何をどのようにすれば良いのかわからない」「全くわからないのでお任せします」といった問いあわせも少なくないため、子ども達に何を学んでほしいか等を教員にも意識してもらい、実施するにあたり協力しあい、共に作りあげていきたいです。また、生徒にとってプラスになり、当事者の笑顔が増える福祉教育を今後も実施していきたいです。</p>

地域と社協について	
市の概況	地域の特性
<p>門真市は、大阪府の北東部に位置し、周囲は大阪市・守口市・寝屋川市・大東市と隣接している、人口約12万人のまちです。東西が約4.9km、面積が12.3km²、市域が比較的小さくまとまり、大きな起伏がなく、平坦な土地であることが特徴です。</p>	<p>市内それぞれの地域では、自治会、福祉委員会、地域会議、PTA、消防団、祭り保存会など、地域に根差したで組織があり、地域に合った活動をする人がまちを支えておられます。門真の魅力は人そのもので、「おたがいさま」や「おせっかい」といった助けあいの気持ちが地域につよくあり、人のやさしさ、温かさを感じるまちです。</p>
社協の福祉教育推進体制	ホームページ・SNSなど
<p>ふくしとわたし、肢体不自由（車いす）、高齢者（疑似体験）、視覚障がい、聴覚障がい、障がい者スポーツ（ボッチャ）、知的・発達障がいのプログラムがあります。またそれぞれの障がい分野には当事者に協力していただいております。7名の福祉教育担当者があり、ゆくゆくは担当者一人ひとりがそれぞれの障がい分野のプログラムを当事者と一緒の実施できることを目指しています。</p>	<p>社協HP 社協Instagram</p> <div style="display: flex; justify-content: space-around; align-items: center;">   </div> <p style="text-align: center;">@KADOMASHISYAKYO</p>

キーワード:障がい理解、ボランティアグループの活性化

タイトル:精神保健福祉ボランティアと連携した精神障がいについての福祉教育

東大阪市社会福祉協議会

プログラムの概要

「目的／ねらい」

精神保健福祉への理解を深めること、当事者が自らの経験や思いを発信できる機会を創出すること、そして地域において顔の見える関係づくりを進めることが挙げられます。これらを通して、互いに支え合い、誰もが安心して暮らせる地域社会の実現を目指します。

きっかけや課題意識

手話・アイマスク・車いす体験などの福祉教育は実施しているが、精神障害への理解不足という課題があり、啓発の必要性を感じた。
また、ボランティアセンターの登録に精神保健福祉ボランティアを目的とした団体が1グループあり、所属メンバーから福祉教育活動等への興味を持っているとの声があった。

実施するためのプロセス

- STEP1
他市の事例等の情報収集 (R7.2.17)
- STEP2
福祉教育実践の目的・プログラムの検討
- STEP3
活動場所の確保に向けた調整
- STEP4
福祉教育の実践 (R8年度予定)

協働先

精神保健福祉ボランティアスワンの会
障害関係施設等
精神保健福祉士

実施内容

従来は手話・アイマスク・車いす体験などの福祉教育を実施しており、身体障害の理解は一定進んだものと考えられる。しかし、精神障害に対する理解はまだまだ進んでいない現状がある。そこで、精神保健福祉に特化した教育プログラムを精神保健福祉に特化したボランティアグループ「スワンの会」と連携して作りたい。講座や体験学習、障害福祉施設との協力によって、当事者による実体験の共有を取り入れた参加型の学びを展開することで、「理解→共感→行動」へとつながる継続的な学習の場を提供したい。また、単なる知識の習得にとどまらず、地域共生社会の担い手を育むことを目指す。

ここがポイント!!! 講師からのコメント

従来の体験型福祉教育に加え、精神保健福祉への理解促進を目的とした新たな取組を進められています。精神障害に特化したボランティアグループと連携し、当事者の実体験を直接聞く学びを取り入れることで、知識の習得にとどまらず、共感や気づきを深める機会を創出しています。また、講座や体験学習、地域活動への参加を通じて、「理解から行動へ」とつながる継続的な学びを大切にされている点が特長です。地域で顔の見える関係づくりを意識した実践は、誰もが支え合う地域共生社会の担い手を育む福祉教育として高く評価できます。

今後において	担当者として大切にしたいこと
<p>他市において、こころの病に関する理解促進を目的とした出前授業を実施している団体の実践事例について、2月に情報提供を受ける機会を設ける予定である。</p> <p>R8年度はプログラムの概要についてボランティアグループで検討し、内容が整った段階で、小中学校ならびに地域関係者への周知を進めるとともに、活動場所の確保に向けた調整を行いたい。</p>	<p>①連携団体との協働 関係団体と連携し、役割分担と進行内容を整理する。</p> <p>②継続的な学習の仕組みづくり グループワーク等の双方向の学びを取り入れつつ、振り返りやフォローを通して継続的な学習につなげる。</p> <p>③地域共生社会の視点 精神障害の理解促進を、地域で支え合う関係づくりにつなげる。</p>

地域と社協について	
市の概況	地域の特性
<p>面積:約 61.78 km² 人口:約47万人 世帯数:約23万世帯 ものづくりの町、ラグビーの町として知られており、西は大阪市に隣接し、東は奈良県と面している。</p>	<p>1967年に布施市、河内市、枚岡市の3市が合併しているため、面積が広く人口が多い。また、地域によって交通や生活の雰囲気が異なるため、担当地区によって異なったアプローチが必要になる。</p>
社協の福祉教育推進体制	ホームページ・SNSなど
<p>ボランティア市民活動センターが窓口となって、福祉教育体験の希望分野に応じた登録ボランティアを紹介している。分野としては、①車いす体験 ②手話体験 ③点字体験 ④視覚障害者の手引き体験の4つを行っている。</p>	<p>ホームページ・SNSなど</p> <p>東大阪市社会福祉協議会HP福祉教育掲載ページ https://www.heartnet-hoshakyo.org/volunteer7.php</p>

キーワード: ひきこもり・不登校の居場所づくり、施設・学生・行政との協働

タイトル: Eeeeeスポーツ!!!~そうだ、交野市社協でeスポーツしない?~



交野市社協 マスコットキャラクター
←「にじ丸ちゃん」

交野市社会福祉協議会

プログラムの概要

「目的／ねらい」

社会的孤立であるひきこもりや不登校の人が、共通の興味や関心を持つ人たちと集まり、eスポーツを通じてコミュニケーションが取れる居場所を作る。「コミュニケーションが苦手でも好きなことなら一歩踏み出せるかもしれない」ことが「出かけるきっかけ」につながり、安心して過ごせる場所、有用感を得られる機会を作る。

きっかけや課題意識

交野市には、気軽に参加できるひきこもりの居場所資源が少なく、不登校やひきこもりを家庭内で抱えこみSOSが出しにくい環境となっている。また8050や7040問題を抱える世代も多く、社会から長期間離れているため、外に出ることや人との関わりが難しい状況にある。当事者の方が気軽に出かけられるきっかけとして、共通の趣味や関心を共有できる居場所は現在交野市内にはないため、居場所の資源開発が重要かつ必要な課題となっている。

実施するためのプロセス

- STEP1 大阪府福祉基金振興助成金申請
- STEP2 eスポーツに必要な備品を購入
- STEP3 ゲーム会社に使用許諾申請を提出
- STEP4 協働メンバーとの事前打ち合わせ(体験会)
- STEP5 イベント実施



かたのゲームスポーツフェスタのチラシ

協働先

- ふくしボランティア
 - 学生ボランティア(FAL)
 - キッズボランティア
 - ピアサポーター
 - かたの福祉会
 - 豊年福祉会
 - 教育委員会
 - 子ども家庭室
- CSW合同
会議メンバー



↑ふくしボランティアによる表彰式🏆

実施内容

- ・Nintendo Switchを3台設置し、3種類のゲームを用意。それぞれのブースで自由に対戦を行う。
- ・トーナメント形式で試合を行い、優勝者には表彰状を授与。
- ・ふくしボランティアには、子どもたちの見守りや、誘導。
- ・ふくしの相談コーナーを設け、参加された方から福祉の相談を受ける。
- ・イベントで使用するゲームの準備(キャラクターの解放)を学生ボランティアが行った。



↓世代を超えた戦い🔥



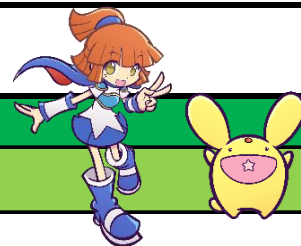
↑みんなでレッツeスポーツ!!










ここがポイント!!! 講師からのコメント

交野市社会福祉協議会では、ひきこもりや不登校など社会的孤立の課題に向き合い、eスポーツを活用した居場所づくりを通して福祉教育を実践されています。共通の「好き」をきっかけに人とつながる経験は、外出や社会参加への第一歩となり、有用感を育む機会となっています。また、施設・学生・行政と連携し、誰もが安心して参加できる環境づくりに配慮されている点も、福祉の学びを地域に広げる取組です。さらに、ボランティアの意識変化を丁寧に支え、理解と共感を深めていく姿勢は、福祉を身近なものとして捉える力を育てる実践であるといえます。

今後における	担当者として大切にしたいこと
<p>12月に開催した「第2回かたのゲームフェスタ」において、施設のCSWのご紹介により、ひきこもり当事者の方と出会うことができました。その方は通院の必要がある状況でしたが、外出に対する強い不安から、CSWが声掛けをしても一歩を踏み出すことができず、いと伺いました。しかし、本イベントの存在を知ったことをきっかけに、「一度外出してみよう」と思っていただけのことです。実際に来場されたことで外出への不安が和らぎ、自信につながり、結果として通院にも前向きに取り組めるようになったとお聞きしています。この事例を通して、不登校やひきこもり状態にある方々にとって、外出すること自体が非常に高い心理的ハードルであることを改めて実感しました。一方で、安心して参加できるイベントの開催が、社会との接点を持つための重要なきっかけになり得るということもわかりました。参加者アンケートにおいても、定期的な開催を望む声が多く寄せられており、本イベントの有効性を強く感じています。さらに、社会福祉法人かたの福祉会が実施している「メタバース」における居場所支援と協力し、外出先の一つとして本事業を今後も継続していきたいと考えています。</p>	<p>かたのゲームフェスタは一般市民の方も参加可能なため、不登校・ひきこもり以外の方も参加します。不登校・ひきこもりの方が参加する際に、委縮してしまわないように、スタッフの服装や会場の入口の工夫、適切な言葉遣いに配慮しています。不登校・ひきこもりの方が気軽にイベントへ参加することで、「来てよかった」「外出するきっかけができてよかった」と実感していただければと思います。本事業に参加することで、外出する機会を作り、社会につながるきっかけとなるように努めていきたいと思っています。</p> <p>～ふくしボランティアの意識変化～ 当イベントでは、ふくしボランティアの方々に子どもたちの見守りを行っていただきました。イベントは夏と冬の計二回開催しましたが、1回目の開催時には、参加する意義を見いだせず、消極的な姿勢のふくしボランティアもいました。しかし、ふくしボランティア定例会の中でeスポーツの大切さについて繰り返し伝えていくうちに、徐々に意識の変化が見られ、2回目の開催時には参加協力していただきました。</p>



地域と社協について	
<p>市の概況</p> <p>市域：南北・約5.4km、東西・約6.8km、面積・25.56km² 東・奈良県生駒市、北・枚方市、西・寝屋川市、南・四條畷市と隣接 人口：77,325人 うち65歳以上21,581人 高齢化率27.9%（令和7年4月） 社会資源ほか：校区福祉委員会（9小学校区） 地域包括支援センター1か所（社協委託） 基幹相談支援センター（直営） 子育て世代包括支援センター〈母子保健型〉（直営） 地域子育て支援センター〈基本型〉（株式会社委託） 生活困窮者自立相談（社協委託） 中核機関（社協委託）</p>	<p>地域の特性</p> <ul style="list-style-type: none"> ・コンパクトな町であることを活かし、各関係機関や事業所などと連携が取りやすい。 ・緑豊かな田園都市を活かした実践を多く実施している。体験することで、大人になっても記憶に残る実践を重視している。 ・経済的に余裕のある住民が多い。 ・区長制度が残っている。 <p>助成金を活用し、eスポーツのジャンパーを作成しました⇒</p> 
<p>社協の福祉教育推進体制</p> <ul style="list-style-type: none"> ・R6年度よりふくし教育の推進に特化したボランティアグループを結成。（月1回定例会を実施） ・R6年度より交野市内在住・在勤の方向けに、ふくし教育の研修会を実施。（講師：ふくしと教育の実践研究所 SOLA 新崎 国広氏） ・R6年度よりふくし教育プログラムを交野市内の小中学校に配布。 ・交野市内の小中学校の教職員にふくし教育に関するアンケートを実施。（R5年度） ・学校や地域でふくし教育を実施する際の交野市社会福祉施設地域貢献連絡会やその他の福祉事業所との協力体制の構築。 	<p>ホームページ・SNSなど</p> <div style="display: flex; justify-content: space-around;"> <div data-bbox="876 1561 1006 1699">  <p>社協HP</p> </div> <div data-bbox="1104 1561 1234 1699">  <p>社協Facebook</p> </div> <div data-bbox="1331 1561 1461 1699">  <p>社協Instagram</p> </div> </div> <div style="display: flex; justify-content: space-around; margin-top: 20px;"> <div data-bbox="876 1744 1006 1882">  <p>社協X</p> </div> <div data-bbox="1104 1744 1234 1882">  <p>ふくし教育プログラム</p> </div> <div data-bbox="1331 1744 1461 1882">  <p>ふくし教育実践報告2025</p> </div> </div>

掲載されている「ぷよぷよ」キャラクターは、株式会社セガ様の許諾を得て使用しております。



キーワード:障がい理解、大学・関係団体との協働

タイトル:「パラスポーツ競技のゴールボール体験を通し、目が見えない・見えにくい生活を知ろう」



熊取町社会福祉協議会

プログラムの概要

「目的／ねらい」

「目が見えない・見えにくい人」が日常生活を送る中で困り事とは何かを考え、パラスポーツを通じて理解を深める。
さらに日常のさまざまな場面で起こる障がいを理解し、他者への配慮する気持ちを育み、スポーツを通じて「見えない難しさ」を知る。

実施するためのプロセス

- STEP1 各小学校に事業説明を行い、実施の希望を募る。
- STEP2 長居障がい者スポーツセンターへ講師の依頼。また、大阪体育大学へ学生ボランティアとして、参加を依頼。
- STEP3 福祉教育の実施
- STEP4 学校側や実施主体からの振り返り

実施内容

ゴールボール選手をお招きする。

1. ゴールボール体験を行う。
2. 「目が見えない・見えにくい人」の暮らしについて、講義を行う。
3. 実際に日常の生活場面を想定し、グループワークを行う。

「スーパーで買い物をする」といった日常生活の一部を切り取り、どのような困り事があり、またどのような対応方法があるのか意見を出し合う。

きっかけや課題意識

障がいを抱える児童の支援をしていた際、クラスには「かわいそうだから助けてあげよう」といった意識が根付いていた。その際、どのような方でも分け隔てなく「困っているから助けよう」と意識を持ってほしい、その方の素晴らしいところを見てほしいと感じていた。
以前、ゴールボールの競技を見た際、感嘆した事があったため、福祉教育の場で、「見えにくい難しさとその状況でも競技ができる素晴らしさ」を同時に経験できるのではないかと考えたためである。


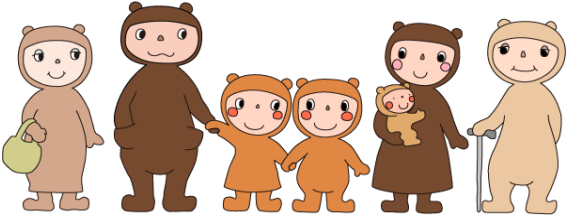
協働先

大阪体育大学
長居障がい者スポーツセンター

ここがポイント!!! 講師からのコメント

熊取町社協の福祉教育実践は、「障がい理解」を軸に大学や関係団体と連携した福祉教育に積極的に取り組まれています。特に、視覚に障がいのある方の暮らしや困りごとを、パラスポーツを通して体験的に学ぶ取組は、児童が「見えない難しさ」と同時に、その中で発揮される力や素晴らしさに気づく貴重な機会となっています。「かわいそうだから助ける」という意識から、「困っているから自然に支え合う」姿勢へと意識の変化を促し、他者への配慮や尊重の心を育てています。身近な生活の中に福祉を見出す視点を大切にした、地域特性を生かした実践であるといえます。

今後において	担当者として大切にしたいこと
<p>実施において、関係機関へ協力を依頼する。一定の概要が整った段階から、各小学校に向けて働きかけを行い、調整を進めていきたい。</p>	<p>日常生活において、「福祉」は少し視点を変えれば、身近に感じることができる。福祉に触れたとき、感じ方は各々違う。その「良いきっかけ」をつくる場ができるようなサポートを心掛けたい。</p>

地域と社協について	
市の概況	地域の特性
<p>熊取町は大阪府南部・泉南地域に位置する町で、人口約4.3万人（世帯数1.8万世帯）と大阪府内の町では最大の人口で、高齢化率約30%です。本町の総人口は、減少傾向で推移しています。</p>	<p>本町には大学のキャンパスや研究施設があり、永楽ダム周辺をはじめとする、自然と調和した町です。また町の取り組みとして、「子育て世代に選ばれるまち（ほほえみ子育て熊取町！等）」の推進も掲げ、子育て世代への支援や、地域の健康づくり、安全安心な環境整備にも注力しています。</p>
社協の福祉教育推進体制	ホームページ・SNSなど
<p>年1回、熊取町にある小中学校の福祉教育担当者を対象とし、福祉教育協力校連絡会を開催している。テーマは「昨年度福祉教育の報告」「今年度の福祉教育の事業計画と見通しについて」とし、振り返りや意見交換を行う。 令和5年度より、町内の小中学校を対象に「こんな福祉教育をお手伝いできます」を配布。 地域福祉計画及び活動計画の作成にあたり、福祉教育協力校を対象に「福祉教育協力校アンケート調査」を実施。（令和5年度）</p>	<p>ホームページ https://kumatorishakyo.or.jp/</p>  

キーワード:障がいの理解、当事者・ボランティア・学校との協働

タイトル: 「障がいのことをもっと知ろう」～障がい者スポーツを楽しむ先生の話を知ろう!～

和泉市社会福祉協議会

プログラムの概要

「目的／ねらい」

福祉教育を通じて、子ども達が「可能性に挑戦する」「障がいとは何か」について考え、障がいについて偏見のない正しい理解を少しでも持つことを目指す。また、障がいの有無に関係なくすべての人が活躍できる社会の大切さを学ぶ。

きっかけや課題意識

車いす・アイマスク体験などは体験のみで終わってしまうことが多く、そうならない福祉教育を実践したい。子ども達が持っている障がいのある方に対するの価値観を変えたいと思ったため。

実施するためのプロセス

STEP1

ふくしについての導入授業を実施する

STEP2

福祉体験学習(車いす・アイマスク体験)を実施する

STEP3

ユニバーサルデザインの授業を実施する

STEP4

障がい当事者の講座を聞く



協働先

- ・学校(福祉教育のみで4時間も授業時間を確保いただきました。)
 - ・和泉ボランティア・市民活動センター (アイ・あい・ロビー)
 - ・障がい当事者の方
- 「障がいを持っていることは特別なことじゃない。もし困っている人がいたら助けてあげて欲しい。」ということ子ども達に伝えたいとおっしゃっていました。

実施内容

- ①福祉についての導入「ふくしてなんだろう?」の授業を行い、子ども達に福祉について知ってもらう。
- ②福祉体験学習(車いす・アイマスク体験)を実施し、自分だけでなく、障がい当事者の方や相手の立場に立って考える力を育む。
- ③ユニバーサルデザインの授業を行い、そのようにデザインされた理由や背景を自身の体験も踏まえて学び・感じてもらう。
- ④障がい当事者の想いを聞き、自身の学んだことや経験を踏まえ、誰もが活躍できる社会の大切さに気づき、自分にできる事はなにかを考える力を育む。

ここがポイント!!! 講師からのコメント

子どもたちが障がいを正しく理解し、可能性に挑戦する姿勢を育むことを目的に、段階的な福祉教育を実践されています。導入授業から体験学習、ユニバーサルデザインの学び、当事者講話へとつなげる構成により、体験で終わらせない深い学びを実現しています。特に、地域の特性を生かした当事者の前向きな体験談は、子どもたちの自尊感情や他者への思いやりを育む貴重な機会となっています。支援する力と支援を受ける力の双方の大切さを伝える取組は、地域共生社会の担い手を育てる福祉教育として高く評価できます。

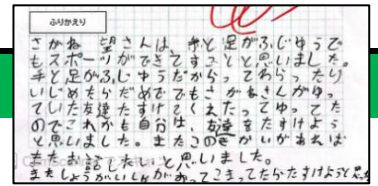
授業を受けた後の感想

障がい当事者の想いを聞き、

「あきらめなければ夢は叶うという言葉が心に残った。」

「講師の話の中で友達に助けられたと言っていたので、自分も友達が困ってたら助けようと思いました。」

等の子ども達の様々な気付きの言葉が感想文に書かれていた。



今後において

社協の福祉教育では、21校区中の一部の小学校の授業に関わらせていただいています。和泉市では、認知症サポーター養成講座や福祉体験学習等、他の関係機関も学校の福祉教育に関わっており、今年度は、それらの機関と共に学校との連携や相互理解を深めながら、地域の子ども達の学びを深める機会を作ること考えていければと思っています。

担当者として大切にしたいこと

今回の福祉教育で、子ども自身が地域にはたくさんの方の立場の方がいて、子どもから大人、障がいのある方、様々な方が支え合って成り立っていること、自分たちも地域の一部として誰かを支えていることや、「支援力」+「受援力」の大切さを実感してもらうきっかけになることを期待している。

地域と社協について

市の概況

人口：181,322人(2025年12月末現在)
面積：85.0km²
小学校数：19校(うち2校は小中一貫校)

地域の特性

和泉市は北部、中部地域は大型ショッピングモール、鉄道路線、高速道路ICなどの市街地が形成され、南部地域では豊かな自然環境が維持されています。絵画、工芸品などを収蔵する美術館などもあり、文化施設も充実しています。また、お芋掘りをはじめ、みかん狩り、いちご狩りなど農業の魅力を体験できる四季折々の催しも行われており、都市環境と豊かな自然が調和した「トカイナカ」の環境が形成されています。

社協の福祉教育推進体制

和泉市では、福祉教育の分野に応じて、地域福祉係とボランティア・市民活動センターで業務を分担しており、連携を取り合いながら福祉学習にあたっている。また、地域の様々なボランティアさんや企業様と協働で福祉学習を実施している。

ホームページ・SNSなど



HP



Instagram



facebook

まとめとして

大阪府社会福祉協議会の業務研究会「総合的な福祉教育実践研究会」は、平成29（2017）年に発足し、令和7年度で9期目を迎えました。本研究会は、市町村社会福祉協議会における福祉教育を、社協の総合性を発揮する中核的な実践領域として位置づけ、その推進・検証・普及に取り組んできました。あわせて、職員相互の実践交流や省察を通じた専門性の向上を図ることを目的としています。その根底には、子どもから大人まで、地域に暮らすすべての人が「ともに生きる力」を育む福祉教育を通して、地域共生社会の実現を目指すという基本的な理念があります。

本年度の研究会では、「社協の総合性を生かした福祉教育とは何か」を共通テーマに、三つの視点から検討を行いました。第一に、当事者や地域住民、学校、福祉施設、企業など多様な主体が参画し、対話と協議を重ねる協働的プロセスの重要性を確認しました。第二に、サービ斯拉ーニングの視点を取り入れ、地域や福祉の課題を自らの生活と結びつけ、省察を通して行動につなげる学習の在り方を重視しました。第三に、社協職員が事業全体を福祉教育として捉え、連携力や企画力を高めることの必要性を示しました。

今年度に参画された7市町社協の実践は、障がい理解、高齢者理解、精神保健福祉など、地域の実情や課題に即した多様な福祉教育が実践を報告しています。例えば、eスポーツやパラスポーツ、当事者講話、体験学習、地域活動への参加など、方法は多岐にわたりますが、共通して重視されているのは、当事者の声や生活実態に触れながら学ぶ体験を通じて、福祉を「特別なもの」ではなく「自分たちの暮らしに関わる身近なもの」として捉える視点を育むことです。

また、学校、福祉施設、ボランティア、大学、行政など、多様な主体が連携・協働することで、学びを一過性の体験に終わらせず、理解から行動へとつなげる継続的な学習過程になるよう試みています。こうした取組は、支援する側・される側という固定的な関係を超え、誰もが支え手にも受け手にもなり得るという相互性への理解を深めています。これらの実践は、地域のバリアを取り除き、人と人とのつながりを育てながら、支え合いが日常となる地域共生社会の担い手を育成する福祉教育として、高い意義を有しているといえます。

この実践事例集で得られた知見を参考に、真摯に福祉教育実践に取り組んでおられる各市町村社協の福祉教育実践に少しでもお役に立てば幸いです。

「ふくしと教育の実践研究所 SOLA 主宰」(社会福祉士)

新崎 国広 氏

令和7年度 業務研究会「総合的な福祉教育実践研究会」実施要項

1. 趣旨

本研究会は、市町村社協における福祉教育を社協の総合力を発揮する機会ととらえ、さらなる推進、普及に取り組むとともに、実践に関わる職員同士の交流や研鑽、資質向上を図り、もって子どもから大人までの“地域”を対象とした「ともに生きる力」を育む福祉教育プログラムの提案・展開に資することをめざして実施いたします。

2. 主催 社会福祉法人 大阪府社会福祉協議会

3. 参加対象およびメンバー

- ・市町村社協における、福祉教育担当職員または福祉教育に携わっている方
- ・学識者 新崎 国広 氏「ふくしと教育の実践研究所 SOLA 主宰」(社会福祉士)

4. 実施内容

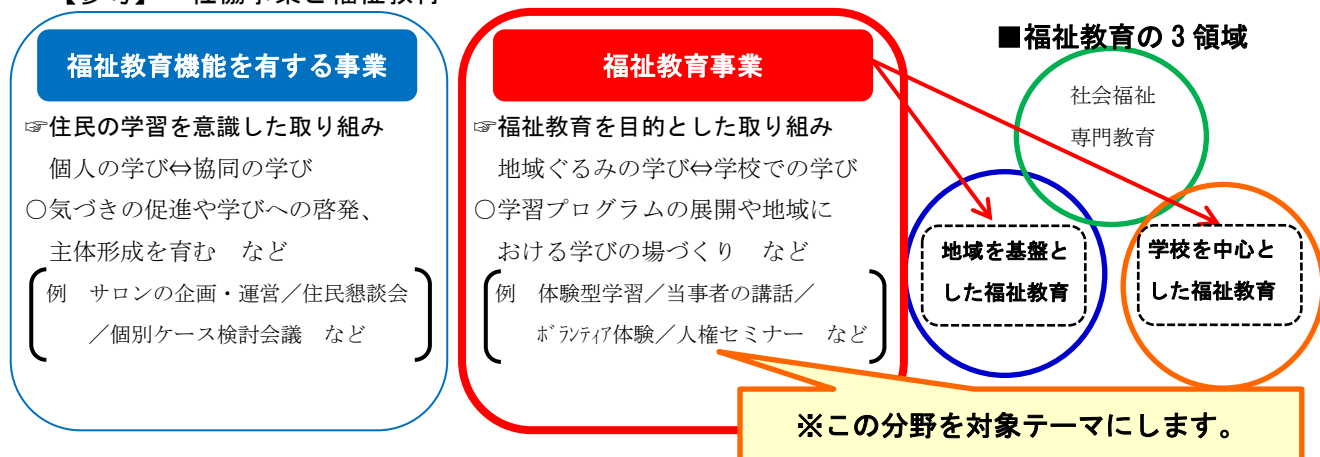
- ・市町村社協における福祉教育実践の研究・協議・研鑽
- ・福祉教育に関する事例検討 等

5. 対象テーマ

「社協の総合性を活かした福祉教育とは? ～福祉教育事業の実践と研究から学ぶ～」
「福祉教育事業」

- ・・・福祉教育を目的とした取り組み (地域ぐるみの学び⇔学校での学び)、学習プログラムの展開や地域における学びの場づくり など。

【参考】～社協事業と福祉教育～



6. 実施期間

- ・令和7年6月～令和8年3月まで 4回程度の開催予定
- ※上記は概ねの予定です。変更になる場合がございますのでご了承ください。
- ・フォーラムへの協力等 (福祉教育・ボランティア学習学会への参画の可能性あり)

7. 実施場所

- ・大阪府社会福祉協議会 (大阪社会福祉指導センター)、大阪府社会福祉会館 等

8. 事務局・お問い合わせ先

社会福祉法人 大阪府社会福祉協議会 地域福祉部
(担当者: 土生・大野)
〒542-0065 大阪市中央区中寺1丁目1番54号 大阪社会福祉指導センター内
TEL: 06-6762-9631 FAX: 06-6762-9679
E-mail: habu.satiyo@osakafusyakyo.or.jp

令和7年度 業務研究会「総合的な福祉教育実践研究会」メンバー

(敬称略・順不同)

研究会メンバー

No	氏名	社協名	事例タイトル
1	窪田 風子	豊中市	福祉施設と協働した、より学びを深める福祉教育
2	印具 政弥	泉佐野市	アンプティサッカーから始まる地域の輪
3	野村 千恵	門真市	学校と共につくる福祉教育～障がい理解(視覚障がい)～
4	高山 恭彰	東大阪市	精神保健福祉ボランティアと連携した精神障がいについての福祉教育
5	森本 康弘	交野市	eeeeeeスポーツ!!!～そうだ、交野市社協でeスポーツしない?～
6	加瀬 友花	熊取町	「パラスポーツ競技のゴールボール体験を通し、目が見えない・見えにくい生活を知ろう」
7	吉谷 良平	和泉市	「障がいのことをもっと知ろう」～障がい者スポーツを楽しむ先生の話を知ろう!～

アドバイザー

No	氏名	所属
8	新崎 国広	ふくしと教育の実践研究所 SOLA 主宰

事務局

No	氏名	所属
9	難波 志保	大阪府社会福祉協議会 地域福祉部
10	土生 祥代	大阪府ボランティア・市民活動センター
11	大野 祥太郎	大阪府ボランティア・市民活動センター
12	松尾 由美	大阪府ボランティア・市民活動センター

【参考文献】原田 正樹著 福祉教育推進員養成研修テキスト「福祉教育の理論と実践方法～共に生きる力を育むために」
発行:2022年3月 発行者:社会福祉法人 全国社会福祉協議会 全国ボランティア・市民活動振興センター

発行:大阪府社会福祉協議会 地域福祉部
令和7年度 総合的な福祉教育実践研究会
令和8年3月31日